

# あすの淡海

自然と人との共生をめざして

VOL.

45

2024 春号



公益財団法人 淡海環境保全財団

## 30周年記念式典・記念講演会



淡海ヨシの未来を考える会議発足



# 財団設立30周年記念式典開催

淡海環境保全財団は、自然と人との共生をめざして、県民・事業者・行政が一体となって環境保全活動に取り組むために平成5年5月に設立されました。3月9日、当財団の設立30周年記念式典を開催しました。

記念式典では、高木理事長の開会挨拶、江島副知事および田口元理事長のご祝辞の後、長年にわたりヨシ群落の保全再生にご尽力された皆さんに江島副知事から滋賀県知事感謝状が贈呈されました。

また、当財団の沿革、過去や現在の取組みについて、動画による紹介があり、出席者の皆さんには当時の財団の事業の様子などを懐かしくご覧いただきました。

## 知事感謝状の 贈呈を受けられた皆さん

近江舞子内湖を愛する会 様  
びわ湖の水と地域の環境を守る会 様  
西の湖ヨシ灯り展実行委員会 様  
田井中 文彦 様



※公益財団法人淡海環境保全財団設立30周年記念誌は、当財団のホームページに掲載しています。



江島副知事のご祝辞



田口元理事長のご祝辞

当財団が設立30周年の節目の年を迎えることができたのも、滋賀県をはじめ市町、事業者、県民の皆さんのご支援、ご協力の賜物であり、心から感謝申し上げます。

今後も、設立の理念を踏まえ、自然環境の保全と持続可能な地域づくりに向け、多様な主体とともに地域に根差した取組みを進めてまいりますので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 記念講演

式典に続いて開催した記念講演は、元京都大学霊長類研究所所長で、京都大学名誉教授の湯本貴和先生に「琵琶湖における生物多様性の保全～人と森・里・湖の関わりから～」と題してご講演をいただきました。



講演では、植物生態学がご専門で、国内外のフィールドで研究を続けておられる先生から見た生物多様性について、琵琶湖、そして人々が暮らす里と水源の森林の関係性を軸に、人類が共有すべき普遍的な「遺産としての価値」、生態系のもたらす「機能としての価値」、安心安全な生態系の「指標としての価値」の3つの側面からわかりやすくお話いただきました。

中でも、「放置すれば日本は森林化してしまう。ヨシ原もそれを保ち続けてきたコミュニティの活動があってこそ、存在している」「ヨシの火入れの必要性からもわかるように、自然で

はなく人が作り上げてきたのがヨシ群落」というお言葉が印象に残りました。今後、多様な主体がヨシ群落の保全再生にかかわるとともに、様々な形で活用するなど多面的な価値を積極的に発信する必要性を感じました。



## 淡海ヨシのみらいを考える会議発足

人とヨシとの新たな関係の構築

ヨシ群落を取り巻く状況は、この30年間で大きく変化しています。ヨシ群落が果たしてきた役割を再認識するとともに、将来に向けて人とヨシの新たな関係を築くため、ヨシに関わる多様な主体が一堂に会し、語り合う場である「淡海ヨシのみらいを考える会議」を記念式典に併せて発足させました。

### 淡海ヨシのみらいを考える会議 設置目的

- ヨシの良さ、大切さを広く啓発し、ヨシに対する県民の関心を高める
- ヨシの保全および活用に関わる多様な主体の連携、交流を深める
- ヨシの保全・活用にかかる知識や技術の普及、ヨシの新たな活用策の検討および人材の育成等を推進する

今後、ヨシ保全活動等を行う団体へ積極的な参加を呼びかけるとともに、講演、活動発表および現地見学会などを内容とするフォーラムや保全活動リーダー養成講座を開催する予定をしています。

現在、当会議の参加者を募集しています。詳しくは当財団にお問い合わせください。

自然と人との共生をめざして

# その人に 聞く

京都大学名誉教授  
元京都大学霊長類研究所所長

ゆもと たかかず  
湯本 貴和 さん

生物多様性の保全が世界的に求められる中、当財団では平成5年の設立以来、行政、事業者、県民の皆さんなど多様な主体とともにヨシ群落の保全に努めてまいりました。

去る3月9日に、開催した設立30周年記念事業において「琵琶湖における生物多様性の保全」と題してご講演いただきました湯本貴和さんに、今後のヨシ群落の保全再生の取組や当財団に期待することについてお話を聞きました。



湯本さん

—先生は滋賀県にお住まいと聞いていますが、滋賀県や県民についてどのような印象を持たれていますか。

**湯本さん** 1995年の阪神淡路大震災の10日前、神戸大学から京都大学生態学研究センターに移る際に滋賀県に転居しました。

米づくりの真似事がしたかったので、草津市内に居住しました。滋賀県は自然豊かで農村に残る古い文化など地域研究のフィールドとしても魅力的です。また、滋賀県の人々は控えめな人が多いように思います。

—先生は植物がご専門ですが、これまでどのような研究をされてきたのか教えてください。

**湯本さん** 植物は動物に食われたりして一見受け身のようですが、そうではないと思っています。

私は、植物の生きざまを知りたくて、手掛かりとして花や果実の研究から始めました。花は色や形や匂い、咲く時間など多様です。風が花粉を媒介する植物があり、熱帯雨林に咲くランの一種は特定の動物だけが花粉を運べるような花をつけます。また、ドリアンやマンゴスチンなど熱帯の果物は、日本のと違いますよね。それは食べて種子を運ぶ動物が違うからです。

山極壽一先生と一緒にアフリカでゴリラやゾウの研究をしたのが、霊長類に通じる世界の入り口でした。植物も自分の生活に不可欠な葉は食べられないための工夫をしているわけです。その後、霊長類の食べ物としての植物の研究を続けています。

—先ごろ、トチノキ学ネットワークを発足されましたが、なぜこの時期に行われたのですか。

**湯本さん** イヌワシが住む貴重な天然林がある源流域は、産業もなくなって過疎化が進み、人の目が届かなくなってきて環境によくないことが起こっている。今、全国的に深刻になっている山村過疎問題を一緒に考える仲間が欲しかったからです。

源流域に入りこむと、どうやってここで人が暮らしていたのかという村があります。江戸から明治時代には、獣は肉や皮の他に薬として、あるいは山野草も薬として大きな需要がありました。また薪炭や木材など、山村ならではの生産があったから生活ができたわけです。それが第二次世界大戦後に急速に衰退し、新しい産業への転換ができなかった。都会に行けば高度成長期で職がいくらでもあるので、村を出ていく。山村に新しい産業をおこそうというモチベーションがなくなったと思います。

—琵琶湖との心理的な距離が遠くなっていると感じますが、環境に関心が低い人に対して、どのように働きかけたらよいでしょうか。

**湯本さん** 今から45年ほど前は、身近な自然としての琵琶湖がほんとに危ないという危機感が県民の間で共有された時代で、石けん運動などが始まりましたよね。現在は水質も改善されているし、さしあたって危機を感じにくい。水資源としての価値が強調されるがゆえに、生態系とか生物多様性、文化や歴史などの価値が後方に隠れ過ぎていると思います。それらの価値の発信が充分なされていない気がします。

—今後のヨシ群落の保全にあたってどのような観点から取り組みばよいでしょうか。

**湯本さん** ヨシ群落を維持してきたコミュニティを含めて、ヨシにかかわる人のネットワークを再構築することは1つの方法だと思います。SDGsの考え方を取り入れ、ヨシを使ってどんな問題が解決できるのか考えると、いろんな方が関与して貢献できるのではないのでしょうか。

私は、SDGsの17の目標は配慮すべきチェックリストだと思っています。ヨシには、CO<sub>2</sub>削減と生物多様性保全に加えて、女性の社会参加やまちづくりなど、様々な要素があります。このSDGsのチェックリストとうまく関係づけて、多くの人たちと力を合わせる事が大事です。

—生物多様性保全は温暖化対策に比べると難しいと思いますが、何から取り組みばよいでしょうか。

**湯本さん** 地球温暖化はメカニズムがある程度わかっているので、CO<sub>2</sub>削減という目標が明確ですが、生物多様性は複雑で一つの尺度で測れません。こうすれば大丈夫というシンプルな答えがないのが一番大きな問題です。「場所に則した保全手段」というOECMの考え方で「自然共生サイト」を環境省が進めていて、滋賀県は頑張っ取り組んでいます。多くの企業は土地を持っていますから、その土地に生物多様性への配慮があるかというのが、今後CO<sub>2</sub>の削減量と同じくらい評価される時代が遠からず来ると思います。

—今後の財団に対する期待をお聞かせください。

**湯本さん** ヨシ群落は琵琶湖を代表する沿岸植生であり、琵琶湖の固有種など生き物のゆりかごでもあります。滋賀県民のふるさとの拠り所として、琵琶湖の生物多様性と文化の観点から多面的な価値をさらに発掘し、地球環境問題の解決への道筋をしっかりとアピールして欲しいと思います。

—趣味ではどのようなことに取り組まれているのですか。

**湯本さん** 4,000m級の山に登れる今のうちに、やりたいことをやっておくことにしました。先月エジプトに行っていたのもそうですし、来月はルワンダにマウンテンゴリラの観察に行きます。8月には、首都圏の中高生を集めてマレーシアのキナバル山に登ったあと、野生のオランウータンを見に行きます。



屋久島にて  
(写真提供：湯本さん)

持ち前のバイタリティで  
ますますのご活躍を期待しています。

# 日本 ヨシ紀行

ヨシの風景を訪ねて

## 第19回 北上川(宮城県石巻市)

北上川は、水源の岩手県を南北に縦断して宮城県に入り、石巻市北上町追波湾で太平洋に流れ出す、東北一の大河です。古くから河川交通の要路で、新田開発によって穀倉地帯となり流域に恵みをもたらす「母なる川」である一方、大洪水を引き起こす暴れ川でもありました。江戸時代から何度も河川改修が行われ、明治期の大洪水を機に市街地へ流れを付け替える事業が始まり、昭和9年の完成後、新河道の中の旧集落の田畑跡にヨシが自生し、約150haもの広大なヨシ原が誕生しました。

この「北上川河口のヨシ原」の川面を渡る風がヨシと擦れ合う音は、環境省の「残したい日本の音風景100選」に選ばれています。ヨシ刈りも古くから



北上川のヨシ原

行われ、ヨシの有数の産地でした。しかし、2011年の東日本大震災により一時約70cm地盤が沈下してヨシ原の半分が失われ、津波による侵食等で地形や底質が大きく変わるなど、動植物の生息環境が激変しました。現在、国土交通省や地元の方々が、ヨシ原

再生に尽力されています。

以前は、屋根葺き用の材料、土壁の下地や、<sup>すだれ</sup>簾としての利用が主で、過去には海苔簀の原料としたり、周辺の水田では初夏に肥料代わりに入れたということです。昭和60年頃は、丈の高いものを琵琶湖周辺の業者にも出荷したようです。「春は田植え、夏はシジミ採り、秋は稲刈り、冬はヨシ刈り」が、暮らしに根付いていたといえます。



以前からヨシ業者と地元の方がヨシ刈りや火入れを実施してこられましたが、地元で環境保全を行うNPO「りあすの森」が、ヨシ刈りボランティアを企画実施しています。また、「ヨシ原を守る会」が発足して、ボランティアによる火入れが行われるようになりました。

さらに、震災で減少したヨシ原を復活すべく仙台市の中学生がヨシ植栽を行い、地元の高校生は作業所と一緒にヨシを使ったクッキーの開発に取り組まれています。

協力 有限会社熊谷産業、NPOりあすの森  
次号からは滋賀県のヨシ地をめぐる「淡海ヨシ紀行」を連載します。

## 滋賀県 地球温暖化防止 活動推進員 リレートーク



井上 博之さん  
栗東市在住

今回は、火おこしをはじめ「楽しい体験を入り口に地球温暖化防止を学ぶ」プログラムをいくつも形にされ、教材のメンテナンスを長年にわたって続けておられるこの方です！

私が環境問題に関心を持ったのは、会社員時代の終盤にISO14001の導入に関わったのがきっかけです。定年後、県の環境自治推進員に応募し湖南グループで「ごみ問題」について約1年半調査・討議を行ったのが始まりで、その後、環境NPOにも加わり環境ISOの普及活動を行いました。自治推進員の時、環境問題は「草の根運動」を地道に進める必要性を感じましたので、第4期の温暖化防止活動推進員に応募し、継続して活動してきました。

この間、同じ思いを持つ人達と知り合いになり、色々な啓発活動に参加できて充実した年月を過ごすことができました。

中でも「竹細工と木工」の趣味を体験学習の教材開発に生かすことができ、参加者が体験を通して喜んでくれると、こちらも嬉しくて元気をもらえます。

今後もこれまでの経験を生かして、地域の子どもの育成に関わっていければと思っています。



コミュニティセンターで講座を行う  
井上さん

地球温暖化防止活動推進員は、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、知事から委嘱され、温暖化防止にかかる普及啓発が行われています。

## 「水環境体験学習ツアー in 矢橋帰帆島」

2月11日(日)および3月10日(日)、リニューアルした「淡海環境プラザ」において小学生とその保護者を対象とした「水環境体験学習ツアー in 矢橋帰帆島」が滋賀県下水道課の主催で開催され、当財団はその企画運営に協力しました。両日の午前午後に分けて事前予約された36組111名の皆さんがそれぞれのツアーに参加されました。

ツアーでは、まず下水道に関するお話や実験があり、続いて滋賀県最大の下水処理場である湖南中部浄化センターを歩いて見学していただきました。その後、プラザに戻って、ヨシ、温暖化防止、ごみなど幅広い環境問題について、大人も子どもも約2時間にわたる体験型プログラムを通して、楽しく学んでいただきました。ツアーに参加された皆さんからは「もっと下水処理施設を見たい」「もっと様々な環境問題を知りたい」「ツアーはあつという間だった」など、嬉しいご感想をいただきました。



## トピック

### 放課後児童クラブでの行動変容モデル事業 ～日野町・わたムッキーで地球温暖化対策の連続講座

日野町の放課後児童クラブ「わたムッキー」の協力のもと、毎日放課後を過ごす児童クラブで気候変動教育を継続的に行うことで、脱炭素につながる行動を習慣化し、確実に行動変容に繋げることや、児童が自ら考え計画し、行動を起こしていく力を養うことを目的としたモデル事業を実施しました。



- 事前打合せ 指導員と一緒に企画検討。方針、年間スケジュールを設定。
- 第1回 資源循環講座後、段ボールコンポスト堆肥づくり、野菜栽培を行った。(継続中)
- 第2回 省エネ講座後、夏休み期間にワークシートをつけ毎日自身の省エネ行動を振り返った。
- 第3回 購買行動講座ワークシートの中間見直しを行った。  
また、マーク図鑑と手帳を配布し、夏休み期間中、継続してマーク探しを行った。
- 第4回 創作お買い物ゲームを作成した。
- 第5回 情報発信：児童が保護者に向けお買い物ゲームを実施し、保護者に啓発した。
- 第6回 課題発見：児童自身によるオリジナルワークシートの作成を行い、それに基づき冬休み期間に省エネ行動を実践した。(保護者の感想も書いてもらった)
- 第7回 ワークシートによる実践成果を評価した。



事業実施前後のアンケート調査の結果から、イベント終了後に「地球温暖化を防ぐため自分が何ができるかを考えたことがある」児童の割合が63%から87%に、「自分で行動していることがある」児童の割合が63%から100%にそれぞれ上昇し、児童に考える力が身につく、行動変容に確実に結び付いたことが明らかになりました。

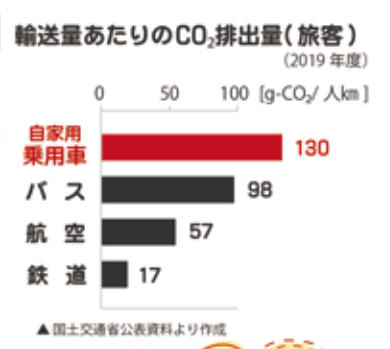
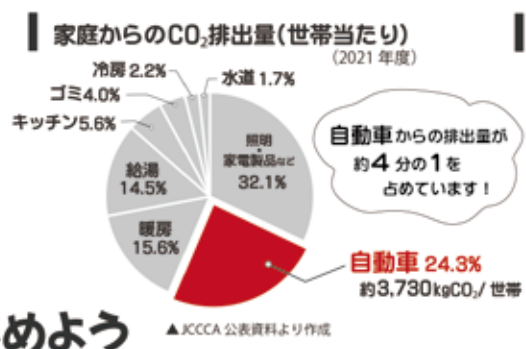
この事業は、環境省の令和5年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(地域における地球温暖化防止活動促進事業)の一環で実施しました。

## 暮らし方にあわせて エコで快適な移動手段をえらぼう

日々の移動手段の選択が、地球環境に影響を与えています。家庭からのCO<sub>2</sub>排出量のうち、自動車から排出されるCO<sub>2</sub>排出量は家電製品に次いで大きな割合を占めています。また、他の交通手段と比べて自動車のCO<sub>2</sub>排出量が多いことがわかっています。現代は移動手段が多様化しており、**自動車に頼らず生活する工夫や、自動車に乗りながらも持続可能なライフスタイルの実現に向けた取り組みができます。**「スマートムーブ」は環境負荷を低減するだけでなく、**移動の快適さ・便利さ、さらには健康増進にもつながります。**この機会に移動の仕方を見直し、最適な移動手段を組み合わせることで選択しましょう。

**スマートムーブとは?**

「環境にやさしい」として、通勤・通学、買い物、旅行など日々の暮らしの中の移動について、CO<sub>2</sub>排出量の少ない方法を選択しようというもの。日々の移動をエコにするライフスタイル。



### 移動手段の改革をはじめよう



CO<sub>2</sub>ネットゼロ社会の実現には、自動車に比べてCO<sub>2</sub>排出量が少ない公共交通や、自転車・徒歩での移動が好ましいです。自動車を利用する場合はEVを利用したりエコドライブを心がけることでCO<sub>2</sub>排出量を減らすことができます。

環境にやさしい輸送手段で運ばれた商品の証!

**エコレールマーク**

環境にやさしい鉄道貨物輸送に取り組んでいる企業や商品と認定された場合に、その商品やカタログ等につけられるマークです。マークを通じて環境負荷低減の取組を表示することで、消費者はその企業が環境への取組を行っていることが分かります。

check!

### “車を使わない”編

#### 公共交通をつかう / 近距離は自転車・徒歩に変える

定刻通りの運行で目的地への所要時間が把握しやすい! まずは晴れた日にチャレンジ

日々の生活において、「公共交通」は私たちの移動手段に欠かせません。日本の公共交通はほぼ定刻通りに運行されており、目的地への移動にかかる時間がわかりやすいという利点があるほか、多くの人が一度に乗り合うため、一人あたりのCO<sub>2</sub>排出量が少なくなり、自家用車と比べて環境にやさしい移動手段といえます。また、最寄りの駅まで徒歩や自転車で行き来することで、軽い運動にもつながります。



CO<sub>2</sub>削減量 410 kg/人

通勤・通学のための都市部での自動車移動がバス・電車・自転車に置き換えられた場合

通勤・通学以外の目的のための都市部での自動車移動がバス・電車・自転車に置き換えられた場合

CO<sub>2</sub>削減量 243 kg/人

#### シェアサイクル “所有”から“シェア”の時代へ

**シェアサイクルとは?**

国土交通省「シェアサイクルの普及促進」より  
複数のサイクルポートを相互に利用できる利便性の高い交通システム。特に都市部では、公共交通を補完する重要な役割を担っている。

Fun to Share!

ピワイチにもおすすめ!

予約不要

どのポートに返却してもOK

※上に示した特徴は一例で事業者によって差があります。ご利用の際は個人でご確認ください。

#### パーク&ライド 目的地や移動距離により 移動手段を変えてみよう

**パーク&ライドとは?**

環境省「スマートムーブ」より  
自動車を駅周辺の駐車場に停めて(パーク)、電車やバスに乗り換えてもらう(ライド)取組。渋滞対策にもつながるとして注目されている。

自宅 → 最寄駅 → 最寄駅 → 目的地

車だと渋滞するかも…到着時間が読めないな~

駅と直結みただわ! 電車のほうが行きやすいかも…

## エコドライブ

市街地走行において、自動車は発進するときに全体の約4割の燃料を使います。

何をすればいいの？

### 01 自分の燃費を把握しよう 02 不要な荷物をおろそう

車に搭載の燃費計・アプリ・インターネットなどで把握できます

荷物 100kg で  
燃費 約 **3% 悪化**

### 03 “ふんわりアクセル”でやさしく発進しよう 04 ムダなアイドリングはやめよう

最初の5秒で時速20km  
燃費 **10% 改善**

10分間のアイドリング(エアコンOFF)で  
燃費 **130CC 消費**

### 05 車間距離にゆとりを持って一定速度で走ろう 06 渋滞を避け余裕を持って出発しよう

むだな減速・加速が増えると  
燃費 市街地 **2%** 悪化  
郊外 **6%**

1時間のドライブで10分間道に迷うと  
燃料消費 約 **17% 増加**

ほかにも…

- ◆ 減速時は早めにアクセルを離そう ◆ エアコンの使用は適切に
- ◆ タイヤの空気圧をチェックしよう ◆ 走行の妨げとなる駐車はやめよう

## “エコドライブ”でこんなイコト!

燃料代の削減

交通事故の減少

同乗者の安心

エコドライブで燃費が20%改善された場合

環境省「ゼロカーボンアクション30」「エコドライブ」より

CO<sub>2</sub>削減量  
**148**  
kg/人

自家用車がカーシェアリングに置き換えられた場合

公財)交通エコロジー・モビリティ財団HP、環境省「ゼロカーボンアクション30」より

CO<sub>2</sub>削減量  
**213**  
kg/人

## カーシェアリング

手軽さバグン!  
1時間未満の利用でもOK!

カーシェアリングとは?

公財)交通エコロジー・モビリティ財団 HPより

1台の自動車を複数の会員が共同で利用する自動車の新しい利用形態。相乗りとは異なり、複数の会員が時間を変えて1台の自動車を利用するもの。

レンタカーと何が違うの?

※事業者によってサービスに差があります。ご利用の際は個人で確認ください。

24h利用OK

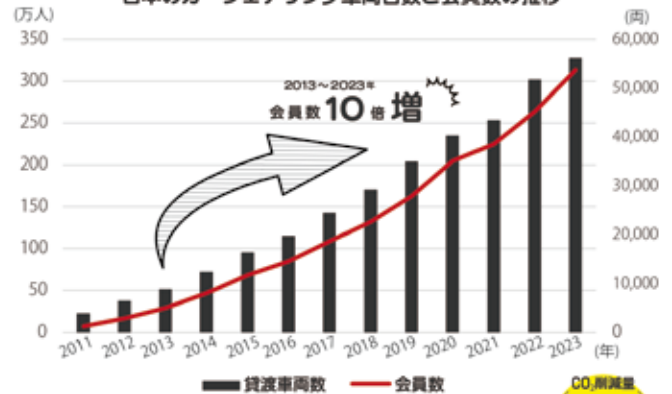
短時間の利用OK

ガソリン代・車検代不要

ユーザー自身で受取・返却(対面なし)

利用者はどんどん増えています!

日本のカーシェアリング車両台数と会員数の推移



## ゼロカーボンドライブ



電気自動車を再生可能エネルギーで充電して使用した場合

環境省「ゼロカーボンアクション30」より

CO<sub>2</sub>削減量  
**467**  
kg/人

ゼロカーボン・ドライブとは?

環境省「Let'sゼロドラ」より

太陽光や風力などの再生可能エネルギーを使って発電した電力と、電気自動車 (EV)・プラグインハイブリッド車 (PHEV)・燃料電池自動車 (FCV)を活用した、走行時のCO<sub>2</sub>排出量がゼロのドライブ。

走行時 CO<sub>2</sub>排出 **0**

### 電気自動車 EV

バッテリー(蓄電池)に蓄えた電気でモーターを回転させて走る自動車

▲バッテリー40kWhの車種の場合。東京電力「EV DAYS」より

- 充電時間の目安 -

普通充電 (6kW) 急速充電 (50kW)

約 **8 時間** **30分~1時間**

寝ている間に充電完了!

### プラグインハイブリッド車 PHEV

搭載したバッテリー(蓄電池)に外部から給電できるハイブリッド車。電池が切れるとガソリンで走行する。

走行時 CO<sub>2</sub>排出 **0**

### 燃料電池自動車 FCEV

充填した水素と空気中の酸素を反応させて燃料電池で発電し、その電気でモーターを回転させて走る自動車

EV普通・急速充電スポット  
MAPはこちら

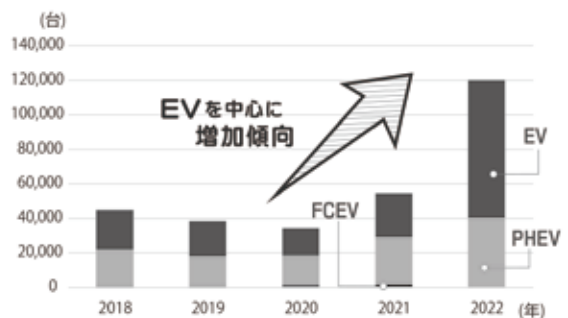


EVsmart  
<https://evsmart.net/>



Go!Go!EV  
<https://ev.gogo.gs/>

## 次世代自動車販売台数(国内)の推移



▲一般社団法人次世代自動車振興センター「EV等販売台数統計」より作成

## 暮らしの中でやってみよう! ネットゼロアクション

- 👍 近い距離は歩いたり、自転車を出かけてみよう
- 👍 シェアサイクルやシェアカーで“持たない暮らし”をしてみよう
- 👍 エコレールマークのついた商品を購入してみよう
- 👍 低燃費な運転を心がけよう
- 👍 アイドリングストップをしよう
- 👍 車の買い替え時にはエコカーを検討してみよう

## 淡海環境プラザがプチリニューアルされました

昨年7月頃から行われていた長寿命化工事が3月半ばに完了しました。工事用の足場もとれて外観がすっきりし、壁面がきれいになりました。

また、施設内のリニューアルも3月に完了し、ホールや展示室1の展示内容が変わりました。

ちょっと新しくなり、水環境を中心としたさまざまな環境問題について、これまで以上に幅広い世代の皆さんが楽しく学べるようになった淡海環境プラザに、是非お越しください。



## ご寄附をいただきました

甲賀農業協同組合(JAこうか)様は、お米やお茶の栽培が盛んな甲賀市・湖南市をエリアとして事業を展開されている総合農協です。

琵琶湖や周辺環境への負荷を軽減した農産物として、火力を使わずに乾燥し製造した『JAこうかのお米 除湿乾燥 特別栽培米「キヌヒカリ」』の販売収益の一部を毎年寄附していただいております。今年も、当財団の公益目的事業全般に充てるため、ご寄附を頂戴しました。

- 財団の事業活動に賛同される皆様からのご寄附および賛助会員を募っています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。
- 詳しくは財団HPをご覧ください、お電話でお問い合わせください。



## 令和6年度の賛助会員を募集します

淡海環境保全財団は、自然と人との共生をめざして、琵琶湖をはじめ滋賀の優れた自然環境を次の世代へ継承するための事業を行っています。

当財団の趣旨目的に賛同いただき、ご支援をいただける賛助会員を募集しています。

皆様のご入会、ご支援をお願いします。

- 会費**
- 個人会員 1口1,000円(年額)として1口以上
  - 団体会員 1口10,000円(年額)として1口以上
- ※当財団へのご寄附については、税制控除制度の適用を受けることができます。

**申し込み** ホームページの入力フォームより、または「入会申込書」に必要事項をご記入ご提出願います。

- 特典**
- 広報誌「あすの淡海」の送付、メールマガジンによる環境情報等のご案内
  - 財団のヨシ製品を2割引で販売(個人会員のみ)

## 編集後記

恒例の水草たい肥配布に加え、30周年記念行事、水環境学習ツアー、びわっこ大使の報告会など、今年の3月は濃密なスケジュールでした。滋賀県地球温暖化防止活動推進員の第13期も始動し、この先も多様な主体とともに歩んで参りたいと気持ちを新たにしました。

# あすの淡海 VOL. 45 | 2024 春号 (年4回発行)

### 発行

公益財団法人 淡海環境保全財団  
〒525-0066 滋賀県草津市矢橋町帰帆2108番地  
TEL : 077-569-5301  
FAX : 077-569-5304  
E-mail : info@ohmi.or.jp

### 滋賀県地球温暖化防止活動推進センター

TEL : 077-569-5301 FAX : 077-569-5304  
E-mail : ondanka@ohmi.or.jp

### 淡海環境プラザ

TEL : 077-569-5306 FAX : 077-569-5334  
E-mail : plaza@ohmi.or.jp



- 用紙: 責任ある木質資源や再生資源を使用したFSC®認証用紙
- インキ: 環境配慮型インキ(植物油インキ or ノンVOCインキ)
- 印刷: 有害な廃液を排出しない水なし印刷